



韓国の技術ギャップと「見える化」

学生たちを指導するに当たり、意外なことに気づかされることは多い。長らく研究の場で働き、自分と同じようなタイプの人たちと時間を共にしてきた身としては、予断を持たない人たちの一言の新鮮さにハッとすることが結構あるものだ。

先日、授業で韓国の自動車産業の競争力を扱った折、「韓国の次世代自動車関連技術は先進国の約八〇％であり、十年後には約九〇％まで高まる」という教科書の記述に出くわした。韓国研究を長年やってきた筆者には対先進国技術格差を扱った何の変哲もない記述であった。ところが、ある学生が「技術について八〇％とか九〇％とかいう数字の根拠は？」と尋ねるではないか。「韓国の技術は日米には及ばないがギャップは将来縮まるといふ論旨を覚えよ」とは言っておいたが、歯切れの悪さは隠しようもなかった。

あの技術ギャップ指標のことは家路の途中でも気になった。電車の中で韓国の新聞社のサイトを調べて最近の記事を調べてみる。試しに「ウリナラ（我が国）八〇％」と入力すると、果たせるかな、この手の表現は健在だった。韓国の国防科学技術が米国の八〇％水準であるという

（『朝鮮日報』一〇月二二日付）。この手の言い回しは韓国では今でも使われているのである。そういえば、こうした表現は韓国が追い上げられる立場においても使われていることを思い出した。造船や鉄鋼などの分野における中国の対韓キャッチアップについて「中国の技術水準は韓国の〇〇％水準」という具合である。

韓国の経済発展において、技術はいわば鬼門にあたる。家電や半導体など、個別の商品分野では日本など先進国を追い詰め、凌駕したとはいっても、根幹技術についてはいまだ劣等感が随所に残る。こうした意識が「我が国の水準は〇〇％」という表現をさせるのだろう。しかし、キャッチアップされる場面でも使う表現であるため、別の解釈も必要だ。おそらくは、技術というところのどこでもないものの「見える化」を図るのがより大きな意味を持つのではないか。これにより数値目標を提示し、関係者の奮起を促すのだ。なるほど、数値目標は限られたリソースと時間の中で最大限の効果をを得るための手法としてしばしば用いられており、韓国の官民はこの種の目標提示があった場合、その達成のため猛然と働くことはこれまでの歩みが証明している。ただ、少々意地の悪い見方をすれば、物事を一次的に捉えがちな韓国の癖が出ているともいえる。世界のトップとなると、先行者の姿をひたすら追うということがいかに楽であったかを思い知らされるであろう。そのとき韓国はどうするのか？その動きを今後も注視したい。

（アジア研究所教授 奥田聡）

＊ 研究所だより ＊

政治の年に相応しく二〇一二年の締めくくりは日本の総選挙となりました。

叢書「アジア・政治の季節」どう政治は変わるか」は近日刊行予定です。

指導者が二期目を迎えた国、新しい指導者が登場した国、いずれの国も多くの課題を抱えて二〇一三年を迎えることとなります。

十二月八日にアジア・ウオッチャー「党大会を終えた中国と日中関係の今後」（講師・遊川和郎アジア研究所教授）を開催いたしました。韓国を初めアジア主要国の政治動向は引き続き調査研究を続けていきます。

二十五年以上もの長きにわたり、公開講座、研究プロジェクトなどアジア研究所の実務を支えてくれた寺門典子さんが一〇月に逝去されました。いつも笑顔で面倒な仕事を嫌な顔一つせず引く受け細かな心配りを忘れない稀有の人柄でした。

心からご冥福をお祈りいたします。